だが、われわれが今日ヨーロッパで新しい領土について語る場合、第一にただロシアとそれに従属する周辺国家が思いつかれるに過ぎない。

この場合、運命自体はわれわれに暗示を与えようと望んでいるかのように思われる。ロシアはボルシェヴィズムに引き渡されたことにより、それまでこの国家を存立させ、またその存立を保証してきた知性がロシア民族から奪われてしまった。なにしろロシア国家の構造組織はロシアにおけるスラブ民族の国政能力の結果ではなく、むしろ低級な人種の内部に存在するゲルマン民族的要素による国家形成活動の驚くべき一例であるに過ぎない。地上の数多くの強国はこのようにして建設されたのである。ゲルマン民族の組織者や支配者を指導者にもつ劣等民族が巨大な国家構造に膨張し、また国家を形成し支えている人種の人種的中核が維持される限り相変らず存続したことは再三再四にのぼる。数百年来、ロシアはその上級の指導層にいたこのゲルマン民族的中核のおかげで存続してきた。この中核は今日ほとんど跡かたもなく根絶され抹消されたと見なすことができる。その代りにユダヤ人が登場した。ロシア人自身にとって、自己の力でユダヤ人のくびきを振り払うことが不可能であるように、ユダヤ人にとってもこの強力な国家を永い期間にわたって維持することは不可能である。ユダヤ人自身は組織の構成分子ではなく、分解の酵素である。東方の巨大な国は崩壊寸前である。ロシアでのユダヤ人支配の終結は、国家としてのロシアの終結でもあるだろう。われわれは、運命によって民族主義的人種理論の正当さをきわめて強力に裏書きするに違いない一大破局の目撃者となるよう選ばれている。

だが、われわれの課題、国家社会主義運動の使命は、わが民族の将来の目標が新しいアレキサンダー遠征といった心を酔わせる感銘で実現されたと見なされてはならず、剣によってのみ大地が与えられうるとしても、むしろドイツのすきによる勤勉な労働にこそ将来の目標があるのだ、という政治的洞察をわれわれ自身の民族が持つようにさせることにある。



＊

**ビスマルクの対ロシア政策**　ユダヤ人がそのような政策に対して、きわめて激しい抵抗の意志を表明することは自明である。かれらは他のだれよりも、この行為が自分自身の将来に対してもつ意味をよりよく感じている。外ならぬこの事実こそ、あらゆるほんとうに国家主義的な考え方をしている人々に、このような新しい方向づけの正当さを悟らせてもよいはずである。だが残念ながら、事態は反対の方向に進む。ただドイツ国家人民党ばかりでなく、「民族主義」的な仲間の中にさえ、このような東方政策の思想に対する熱烈きわまりない挑戦者が現われるが、その場合、同じような状況になるとほとんど例外なく行なわれるように、かれらはずっと偉大な人物を証人として引き合いに出すのである。ナンセンスであると同様不可能であり、ドイツ民族にとっては危険きわまりない政策をかばうために、ビルマルクの精神が引用されるのだ。ビスマルク自身はかってつねにロシアとの友好関係を尊重していた、とかれらはいう。それは絶対に正しい。しかしかれらはその場合、次のことについても述べなければならぬことをまったく忘れているのだ。つまり、ビスマルクがたとえばイタリアとの友好関係にも同じように大きな顧慮を払っていたこと、いやそればかりか、このビスマルクという同一人物がかつてイタリアと同盟したのはオーストリアをより楽に仕末できるということのためであったことに、言及するのをまったく忘れ

角川文庫
—3144—

# 完訳 わが闘争

（下）

アドルフ・ヒトラー
平野一郎
将積茂 訳

角川書店